

ゆらゆら

ゆらゆら

陽炎がゆれる

ゆらゆら

ゆらゆら

広い広い、地平線よりもっと遠くまでつづく金色。

サラサラの砂、ギラギラの太陽。

ほんの少しの緑と絶え間ない熱波。

『神さまと羊』

あの絵本の結末を覚えているかい』

どこまでもつづく黄金の砂漠の中の沃地。

貴重な水をたたえた湖と樹木の繁茂したオアシス。

そこで数十人の男女が休息をとっている。皆服装は様々だが、大多数の人々は日光を防ぐための長袖とバンダナを身につけているようだ。

その集団の中の一人の青年が湖につけていた顔をあげた。

水面の光の反射を受け少し青みがかった白銀の前髪と頬から水滴が重力に従って水面に落ち、幾重もの輪を広げる。

「あら、ユリア、何してたの？」

えくぼが印象的な中年の女性が少年に声をかけた。上品な花柄のバンダナを巻いたふくよかなその女性。性はタオルをユリアに手渡す。

「ありがとう、おばさん。」

ユリアはタオルを受け取るとその中に顔をうずめた。

「ここの湖は凄いいよ。魚もいるし底まではつきり見えるんだ。」

顔にはりついた髪をはがしながら笑ったユリアの真紅の瞳が女性に向けられる。

「そう。それは良かったわ。じゃあここで真水の補給も出来るし日持ちはいらないけど魚が手に入るわね。毎日が楽しいけどキャラバンも楽しじゃないわ。」

この集団は砂漠に所々にある村や砂漠越えの旅人に食料を売って生計を立てている、いわゆるキャラバン隊だ。砂漠だけでなく、大陸の西側で主に活動している。

「そうだな。そろそろ昼飯だろ。キトを呼んでくるよ。おばさん、キトがどこにいるか知ってるか？」

女性キトという人物の母親なのだろう。

ユリアはあたりを見渡した。

「キトなら、天気を教えるためにアヒムと一緒にオアシスの外に行ったわ。」

「アヒムも？外は危ないって言ってるのに……。」

「大丈夫よ。キトも一緒なんですもの。」

「まあそうだな。」

ユリアは苦笑しながら膝についた砂を叩き落とす。

「気をつけてね。」

オアシスから離れると灼熱が肌を焼くようだった。空気中の水分も激減してしまう。

「熱い……。」

ふきだす汗をぬぐいながら砂にめりこむ足を一步步ずつ前へ進ませる。低い砂の丘をひとつこえると二つの人影が見えた。

一人は長い銀髪に空色の瞳の少女、もう一人はま

だ背が低く黒い髪に地味な帽子をかぶっている少年だ。少女は空を指差し、少年は相槌をうっている。

ユリアが近づくと少年が気づいて手を振ってきた。

「ようアヒム、天気の勉強なんだって？お疲れさま。」

少年、アヒムの帽子をたたいて言った。

「今ね、キトに雲の形と天気を教えてもらってたんだ。」

アヒムが帽子をかぶりなおしながら少女の袖を引く。

「こんな所じゃそんなに雲の種類は見られないんだけどね。」

少女、キトはそう言つて肩をすくめて見せる。

「キトはどこで覚えたのかは知らないけど物知りだからな。良い先生になれるよ。」

ユリアがそう言くとキトは小さく笑った。

「もう少し大きくなったら天気の勉強をするために他の大陸やこの大陸の王都へ行くらしいわよ。」

キトがアヒムの頭をなでる。

「そうか！じゃあその時は親父に頼んで、みんな

でアヒムの見送りに行かないとな！」

ユリアの父はこのキャラバン隊の現在の頭だ。

しかしユリアと頭の父は血の繋がりは無く、たまに立ち寄った町で幼いユリアが死にかけているところを拾われて育てられた、ただそれだけの関係だ。

父には子がいなかったため、拾われたユリアが実の息子のように大切に今まで育てられてきた。

精神的ショックで拾われるまでのことを全て忘れてしまっていたらしいユリアをここまで育ててくれた。ユリアはそんな父を感謝と尊敬の目で見ていた。

彼のような人間的にも武術的にも優れた人につかいたい。

同じように少女、キトもオアシスにいる母と呼

ぶ女性とは血の繋がりが無く、拾われて育てられただけの関係だった。彼女は幼少期の記憶があるせいか、よく夜にうなされているようだ。

この大陸は経済的に貧しい者がとても多く、子どもを授かっても大多数の人間が育てていけないのが現実だ。大抵は捨てられるか、奉公に出される。捨てられて早くにのたれ死ぬのか安い賃金でこき使われるのか。選択肢はふたつにひとつ。どちらが子にとって幸せと呼べるのかは分からない。

「そうだ、昼飯。そろそろ時間だから呼びに来たんだ。」

「やった！今日は何かな！ユリア、キト、早く行こうよ！」

アヒムははしゃいで砂に足をとられながらも走っ

ていく。キトもその後を離れないように早足でついでいく。二人が歩き出した事を確認してからユリアも数メートル後をゆつくりと歩き始めた。

隊員の安全と存続を第一に考える。

キャラバンに限らず、全てのリーダーに必要な思考。もう十数年そんな父を見てきたユリアも自然とそうすることに慣れていた。

「……。」

乾いて真っ青に晴れ上がった空をあおぐ。

『ユリア……。』

「？」

ユリアが急に立ち止まった事に気づいて前の2人が後ろをふりかえった。

「どうしたの？」

「なんだか今、誰かに名前を呼ばれた気が……。
呼んだ？」

二人は首を横にふる。

「耳鳴りみたいな感じでどこか遠くで呼んでいる
ような……。低い、男の声だった。」

「空耳じゃないの？だってまわりに私たち以外に

人がいないもの。それよりも早く帰りましょうよ。」

キトの返事に頷きつつ、ふと後ろをふりかえる。

「……………」

その瞳にうつつたのは、倒れている人間とその人間を今にも噛み殺さんとする大蛇の魔物の姿だった。大蛇は真つ赤な舌をのぞかせて大口を開けている。口の端から涎が落ちて人間のマントにしみこんでいく。

「危ない！」

だだっ広い砂漠に銃撃音が鳴り響く。

走っては間に合わないのでユリアが銃で撃つたのだ。銃弾の三発中二発は大蛇の腹に当たり、一発はかすめただけだった。

「何してるのユリア！やめて！」

キトの声にユリアは反論する。

「人が倒れてて殺されそうなのにどうしてやめらんだよ！」

「……………え？」

キトとアヒムの視線がユリアの向こうの風景から彼の顔へ移った。二人とも目を見開いている。

大蛇は恨みがましそうにユリアをにらむと、ヤケになったのか倒れている人間に噛み付こうとした。

「この……！」

ユリアは狙いを定めて大蛇の口に五発の弾丸を叩き込む。魔物は悲鳴もあげずに一瞬硬直した後、砂煙をあげて後ろへたおれた。ビクビクと痙攣する魔物からおびたらしい量の血が漏れて金色の砂を赤く染めていく。ユリアは両手におさまる拳銃をしまつて二人をふりかえった。

「あの人も連れて帰ろう。キト、手伝ってくれよ。」
「……ユリア……？……ええ、分かったわ。アヒム、先に行つててね。」

キトがそう言うときアヒムはぎこちなく頷き走つていった。キトもユリアの後を追つて走る。

倒れている人は女性だろうか、大きめの砂漠越え用のマントから白く細い腕がのぞいていて、バンダナからは綺麗なミルクティー色の髪がのぞいている。彼女は少しも動く気配は見せず、ぐつたりと横たわっている。

「おい、大丈夫か？」

ユリアが声をかけてもその人は返事をしない。意識が無いようだ。キトはユリアの向かいにしゃがみこんだ。

「……。」

無言でユリアと倒れている人を見比べている。

「キト？さっきからどうしたんだ？運んでやろうぜ。」

「あのね、その・・・その人のことなんだけどね。」

「……………あ……………」

そつと女性の肩に手を触れた瞬間、ユリアは頭をおさえて前のめりになって熱砂へ倒れこんだ。頭をおさえる手がガタガタと震え、汗腺から汗が噴き出す。

尋常ではない彼の様子に、キトはさつと顔色を変えた。

「ユリア！どうしたの！？」

しかし彼女の声もユリアには聞こえていない。

「……………えが……………」

「え？」

「こ、え……………声が……………！いつ……………ぐ……………」

ああ、あああ……………！」

ユリアはくぐもつた悲鳴をあげて砂をかくように暴れた。

「ユリア！？ユリア！」

「声が……………頭に……………！」

声が、沢山の声と映像が頭の中に一気に流れ込んでくる。

塩味の水しぶき。

肩ぐるまをしてもらって見た夕焼け。

真紅の衣と祈りのうた。

天まで届きそうな長い石の階段。

荒廃しきった人里。

祈りをささげる老人。

ステンドグラスから漏れる色とりどりの光。

嬉しそうに自らの膨らんだ腹を撫でる妊婦。

「あ、ああああ………!!」

どれも見たことがあるようで、見たことがない
ような。ふわふわと浮世離れたような、声と映
像。

『 どうして

かあさん

なんで

苦しいよ

助けてください

嫌

やめろ

おまえが

きもちわるい

見えない

しんでしまえ 』

小さな子どものものから男性女性、老人まで様々な声が。

『似てる

新しい

おれのせいで

神さま

見たくない

わたしの

お前しか

祈り

天秤が

生きて

うるさい

聞こえない

』

ユリアの体が大きくはねた。

砂が舞い上がる。キトはユリアの震える手をとって肩をゆする。

「ユリア！どうしたの！？」

汗で顔にはりついていいる髪をはがしてやると既に彼が気絶していることに気付く。目を閉じて真っ青な顔をしている。

と、気を失ったユリアの口がかすかに動いて言葉をつむいだ。

「……………父さん……………」

とても短い言葉だった。

ユリアがそうつぶやくと地面に、白く、鈍く眩し

く光る空間が現れ渦を巻き、物凄い勢いで三人を飲み込み始めた。怪しく光り、灼熱の大气と共に三人を飲み込むそれはさながらホワイトホールのようだった。

キトは飲まれていく自分の足をユリアを引きずったまま引き抜こうとするが、もがけばもがくほどそのスピードは増していく。同時に飲まれていく灼熱の大气が頬に当たり、あつく焼け焦げるようだった。倒れていた女性はまだ完全に吸い込まれてしまい姿が見えない。

「何なのよこれ……！」

キトはどんどんと飲まれていくユリアをしっかり抱き寄せもう片手で地面をおさえようとするが、その手もむなしく沈んでしまう。

「こんな所で死ぬわけにはいかないのよ！私が死んだら誰がジルを……！」

瞬間。

音が 声が 光が

消えた。

『おかえり、おかえり、おかえり。

……待っていたよ。』

赤い赤い、水平線へ沈んでいくお日様。

それがとても綺麗に見えるという丘に、自分は誰かに手を引かれながら向かっている。とても大きくて暖かい手に、自分の小さな手がすっぽりとおさまりきってしまう。

『ねえ、もうすぐで着くー？』

自分の声にしているのは高くて幼すぎる。

そうか、これはまだ幼かった頃の……。

『もうすぐかどうかの感じ方は人それぞれだからね。それは分からない。でも私はもうすぐだと感じるよ。』

低くて大人びた男の声。

とても落ち着く、優しい声だ。

『ふーん。父さんが言うならきつともうすぐなんだ！だって、父さんはいつも間違わないもん。』

『そんな事ないよ、ユリア。人は……間違える生き物だよ。』

この人は自分の父親なのか。

父の声は短くそうかえして笑った。

重いまぶたをゆっくりと開く。

目の前には白い天井。

短く息をついて再び目を閉じる。

時計が時を刻む音が部屋に響く。

世界は静かだ。だって、自分の心音と時の音しか聞こえないのだから。

「……此処どこだ？」

ユリアは素早く身を起こしてあたりを見渡した。

部屋の色はシンプルで、白が基調になっているようだ。自分が寝ているベッドのすぐ横にある窓はガラスが二重張りになっていてカーテンも分厚いものが二枚も使われている。

部屋を観察していたが急に飛び起きたので眩暈を

起こし、再びベッドに体を沈めた。頭の中を整理する。

キトとアヒムを昼食が出来るからと言って呼びに行ったときに倒れている人を見つけて連れて帰ろうとした。そしてその人に触れた瞬間に様々な映像と声が頭の中に流れこんできて、その痛みで気を失った。

そのときから今目覚めるまでの記憶は全く無いが、赤い空の下で父親らしき男の影と幼い自分を見た父親というのはキャラバンにいる父ではなく、生きていくかも知からない血の繋がった父だろう。なぜだろうか、そんなことをふと思った。

顔は見えなかった。視点が低かった事と逆光が原因だ。

そして気がつくとその部屋で寝ていた。キトがあの細腕で運んでくれたのだろうか？ ああの倒れて

いた人はちゃんと助かったのだろうか……？

その答えは、まずこの部屋を出てみないと分からない。

「どここの村だろ、ここ……。砂漠周辺の村じゃこんな防寒対策しないしな……。」

ユリアはブーツをはいて部屋のドアを開けた。

「キト……？」

ドアから首だけを出して廊下の様子をうかがう。黒く塗装された木の廊下には誰もいない。どうやら、ここは廊下の一番奥にあたる部屋のように。隣にもうひとつ部屋があり、反対側のつきあたりにも小窓がついている。

ユリアは隣の部屋のドアを少しだけ開けて中を確認するが同じような部屋があるだけでやはり人の気配は無い。この階にあるのは二部屋だけなので階段に足をかけ下へとおりる。階段は次第に黒からセピアにその色を変えていく。おりきつた後で見上げてみると、それは綺麗なグラデーションになっていた。

沈黙を保っているこの家はシンプルで家具も少ないようだ。木製で、落ち着いた色が全てにほどこしてある。

「おはよう。」

「うわあああ！」

急にすぐ横から聞こえた声にユリアは叫びながら飛びのいた。飛びのいたときに当たった棚の上

にあったブリキの汽車の置物がごとん、と音を立てて転がった。

「な、なんだ……キトか……」

そこには幼馴染の少女の姿があった。タオルを腕にかけてこちらをにらんでいる。

「なんだって何よ。私で悪かったわね……」

「いやそういう意味じゃな……」

慌てるユリアの横を通り抜け、キトは上階へと向かう。ユリアも後をついて部屋に入り、床に腰を落とした。キトは窓際にタオルを丁寧にたたんで置いた。

「それで？」

「はい？」

「随分と目が覚めるのが遅かったじゃない……。大丈夫なの？」

ベッドに腰をおろしたキトは床であぐらをかいて座るユリアに問いかけた。先ほど怒らせてしまったからまた何か言われるかとユリアは思ったがどうやらそうではなく、心配してくれているらしい。ユリアは少し考えた後、一連のことを全て話して聞かせた。

「家族のことは覚えてないんでしょ？ 不思議ね……。小さい頃の事を見たなんて。」

「嘘は言っていないからな。」

「誰も嘘だなんて言っていないでしょ。」

ぴしやりと言われて黙り込む。ごもつともだ。

キトの言うとおり、ユリアには幼い頃の家族の記憶がまるで無い。親の顔も、兄弟がいたのかも、どんな生活を送っていたのかも、何ひとつ覚えていない。

キラバンにいる父に拾われたのが約六歳のときだったから、通常では何も覚えていない、なんてことは無いはずだ。

夢に見たのだからもしかすると頭の片隅に残っているのかもしれないが、そのことをいくら考えても全く思い出せないのだ。まるで自分の頭が思い出すのを拒否しているような、忘れ去ろうとしているような、そんな感じがする。

本心では思い出したいのに。大切な記憶を箱にとじこめて、頑丈で壊れない鍵をかけて。その箱

を開けられる鍵はすでに捨ててしまったのか。

ユリアは首をふつてその思考を断ち切った。

「それより、あの倒れてた人はどうなったんだ？
それに此処はどこだ？」

ユリアがそう問うと、キトは彼の真紅の目をじつと見つめてから話し始めた。

「この家は、ノルゼンという村のノアという方のお宅。その方は外出中よ。さつき出ていったの。」

ユリアは不思議に思いながらも話の続きに耳を傾ける。

「それでね、ユリア……その……倒れてた人のこと

なんだけど。」

しばらくの沈黙。

「あの砂漠で、ユリアが気を失う前に目の前に倒れてたの？」

「何言ってるんだよ。俺とキトで運んでやろうって言ったらキトもその人の隣に来たじゃねえかよ。」

キトはそれを聞いてとても驚いた表情をした。空色の瞳が動揺しているせいか、ゆらゆらとゆれている。

「どうかしたか……？」

明らかに態度がおかしいキトにユリアは声をかけ

る。

「ユリア。」

「うん？」

「……ユリア、その時、そんな所に、そんな人はいなかったわ。」

「……はい？」

よく分からない発言にユリアは情けない声で聞き返した。

「私たちの目の前のどこにも、誰も倒れてなかった。それどころか、ユリアが銃を向けて撃った所にも魔物なんていなかった。私とアヒムの目にはそんなもの映ってなかった。」

「……つまり？」

「倒れていた人と魔物はユリアにしか見えていなかったし、砂のへこみぐあいを見てもそんなものは実在しなかった。」

「幻つてことか？」

「そういうことになるかしら。でも、蜃気楼でないことは確かよ。あの時は暑かったけど蜃気楼を見るほどの高温じゃなかったもの。」

幻は幻でも、ただの幻ではないことは確かだ。魔物に実弾が当たったとき、確かにソレは血を吹いた。女性の肩に触れたとき、確かに人肌に触れた感触がした。

「気持ち悪い……じゃあ何だったんだよあれは……。」

ユリアは顔を片手でふさいでため息をついた。そしてその手を退けてぼんやりとキトの顔を見る。

「……何？」

キトは怪訝そうな顔で見返した。

「なんかあの断片的な映像と声を聞いてから、キトって俺の知ってる誰かにそっくりな気がする……。」

「誰か？」

ユリアは頷いた。

「その人のことは頭にパツと浮かんでこないけど懐かしいような……誰だろ。よく似てるってことは

分^わかる。」

キトは彼の言っている意味が分からずに首をかしげた。

一分ほどの沈黙が続く。棚の上のブリキの汽車は倒れたままこちらに背を向けている。水槽の中の魚たちは餌を求めて水面近くで口を素早く開閉している。

その静寂を破ったのは他ならぬこの家の主だった。

漆黒の髪に白い肌、深い蒼の瞳。艶やかな髪から水をボタボタと垂らして顔の水を無造作に手でぬぐっている。

「あれが、ノアさん。」

一階におりてきたキトは、主を紹介した。ノアという短髪の青年は服をしばらくながら立っている二人に気付いた。

「はじめまして。」

ユリアは軽く頭を下げた。

「うん。目が覚めたんだね。はじめまして。」

ノアは低い声でかえした。その声は間のびしていて話すのもとてもゆっくりだ。

「ノアさん……どうしてそんなにびしょびしょなんですか……。」

キトが問うと、ノアは髪の水を落しながら答えた。

「いやあ、帰る途中でわか雨にあつて……。酷い雨だよ。」

ノアがぬれた手でカーテンをひくと、勢いは弱いが多量の雨が降っていた。次々と雨粒が落ちてきて、浅い水溜りの底も見えない。

「……雨だ……!」

ユリアは窓に走りよって外の風景に視線を投げかけた。あのような場所で暮らしていると、用で遠征した際ぐらいにしか雨を目にする機会が無い。

ノアが着替えるため奥へ引っ込んでまた出てく

ると三人は再び二階の一室へ戻って腰をおろした。静寂をやぶったのはキトだった。

「雨が降るってことは……ここは黄の大陸の海岸あたりか別のどこかですよね。」

「うん、そうだね。」

キトとノアが話を進める中でユリアが途中で割り込んだ。

「別のどこかって言っても……俺、ずっと砂漠で育てられてきたし他の事全然知らないんだよな。」

「ユリアとキトは黄の大陸出身なんだね。良いよ、教えるよ。この世界のことを。」

ノアはやはりゆっくりとした口調で話し始めた。

この世界は大きな大陸が五つと、それを隔てる広大な海とで成り立っている。それぞれの大陸には王朝があり、王族が大陸のリーダー的存在だ。

王朝には赤、青、黄、緑、白の五つのシンボルカラーがあり、その王族のおさめる大陸も赤の大陸、青の大陸などと一般的に呼ばれている。

王族は大陸の民がおさめる税によって優雅な暮らしを約束され毎日楽をしているように見えるが、実はそうではない。いざという時に自分の大陸の民を自分よりも優先して護る義務がある。

「ぼく達がこうやって“普通”に生活できているのも、すべて陛下のお陰さ。」

ノアはやはりゆっくりと話した。

「それで此処は……黄の大陸のどこなんだ？」

ユリアがノアに問いかけると、彼は小さく笑った。

「此処は黄の大陸じゃない。此処は、ユーロン・ノックス陛下がおさめる赤の大陸さ。赤の大陸最北の雪の町、ノルゼン。」

ノアの言葉に二人は啞然とする。キトが先に我にかえり、笑顔のノアにまた問いかけた。

「ちよ、ちよっと待ってよ。私達は黄の大陸の内陸にいたのよ？一日も経たないうちに一番遠い赤の大陸まで来れるはずは……」

「そうだね、普通は、無理だよね。」

ノアは笑顔のまま答えた。

赤の大陸と黄の大陸はそれぞれ世界地図の両端に位置する。各大陸間同士の条約により大陸間の移動は船に限られ、かつ隣の大陸までの船しか出ていない。そして世界地図の海の両端は大きな滝になっていて、その滝つぼでは強大な魔物が大口をあけて待ち構えているという伝承がある。

つまり、西の端の黄の大陸から東の端の赤の大陸まで移動する場合、その間に位置する青、緑、白の大陸全てを経由しなければならないのだ。

それを一日で移動したなどと言えば、狼少年の称号をいただけてしまえそうだ。

「君達は本当に不思議だ。ここは湿地なのに。パサパサに乾いた砂まみれで村の入り口に倒れていた

し……。」

「砂だらけで、ノルゼンに？」

「うん、不思議だよね。」

しばらくの沈黙が続く。混乱している二人にノアは優しく声をかけた。

「この街の更に北に住んでおられる彼なら……ユバ様なら、何か知っておられるかもしれない。ぼくの答えの正誤はわからないけれど、彼ならもっと確実なお答えを与えてくださるかもしれない。」

「ゆば？」

「ユバ・ベルグ様。ぼくの薬草学と回復術の先生だよ。」

「ユバ……ベルグ……。」

ノアは自分でいれたハーブティーをすすって付け加えた。

「彼にはぼくから伝えておくから、行ってみるか
い？ ユバ様のもとへ。」

答へは、決まっている。今は少しでも情報が欲しい。キャラバンの皆のところへ帰りたい。

ユリアとキトはノアから簡単な地図を受け取ると彼の家を出た。雨はもうあがったが地面にはところどころ水が溜まっている。

村はいかにも田舎といった感じで、家がぼつぼつと離れたところに建てられ雑草がわきに生えた砂利道が四方八方にのびていた。空気は湿って澄んでいて、味がある。枯れかけて踏まれたたんぼぼが水溜りの底に沈んでいる。

「あっちみたいね。」

キトが地図を見ながら歩を進める。

「キト、砂漠以外の所なんか初めてだよな？ なんとそんなに普通なんだ？ 俺なんかこんな水だらけのどこ珍しくてそんな普通になんかしてられないけどな。」

ユリアの言葉にキトは言葉を濁らせた。

「あ……いや……。」

「やっぱキトは考え方が大人だから、すぐに慣れるのかな！」

ユリアは笑って勝手に自己完結してしまった。

キトは何故か安堵のため息をついて胸をなでおろすのだった。

二人は村を出てすぐの小さな林へ入った。

ユバの家はこの林を抜けた、その奥にある。

「変な所に住んでんだなあ、そいつは……!!」

少し林を歩くと段々とユリアが苛立ち始めた。

獣道のような細い通路を見つけて進むのは骨が折れるのだ。

ユリアが背の高い草をかき分けると、魔物の群れが姿を現した。

ハイエナのような小柄な体躯とは対照的に口からはサーベルタイガーのような鋭い牙が覗く。

『…………げ。』

二人は同時に低い声を漏らす。魔物の群れは真っ赤な眼で睨むと、こちらに襲いかかってきた。

「わああああああ!!」

二人はわき道にそれ、ひらけた場所へ移動する。

「ユリア、こいつらさつさと倒して先に進みましょう。」

「わかってるよ、雑魚だ、こんなの。」

ユリアが腕を前へ突き出すと、手首にはめてあつ

た腕輪が光となり四散、集約した手中で大ぶりの斧に形を変えた。それも、ほんの一秒ほどで。

ユリアの斧にキトが手をそつと触れると、刃のまわりに鋭い大気が渦巻き始めた。動かしていないのにヒュッ、ヒュッ、と空気を切り裂く音がする。

魔物は一度にまとまって前方にいるユリアに襲い掛かってきた。おびただしい数の魔物が二人の視界を埋め尽くす。

「…………ッ！」

ユリアは左足を軸にして斧を力の限り振るった。強く結ばれた唇のその下からは、ギリリと歯と歯がぶつかる音が漏れ、軸にした左足はその下の地面にめり込む。

斧とそのまわりの風の刃の凄まじい威力で魔物の大半は吹き飛んでしまった。少数となつてしまったそれらは後ずさりを始めるが、一匹だけ唸り声を出しながら近づいてくるものがあつた。他より図体も大きく体毛もしつかりとしている。

『……………』

キトもユリアの隣まで歩いてきて魔物を見据える。すると今度はそれはキトに狙いを定めて飛び掛ってきた。さけた口を大きくあけて、黄ばんだ長い牙をのぞかせて。

キトがすつと腕を魔物に向けると、その瞬間。業火が爆発的に発生し、それをあつという間に飲み込み、吹き飛ばしてしまった。風に、灰となつた魔物が舞う。

「楽勝。」

ユリアが斧を軽く一振りすると、それはもう腕輪となつて彼の手首で鈍く輝いていた。

再び元の道へ戻るとまだほんの少しあの魔物がいたが、二人の姿を見るやいなや小さく悲鳴をあげて逃げ去つてしまった。そして二人は獣道を歩き続ける。

なだらかな坂がつづき、魔物も少ない。

深い緑と木漏れ日。景色にとけてしまひそうなほどの、静かな空間。

ユリアが細身の剣で背の高い草をなぎ倒すと一気に視界がひらけた。小規模な庭……というより自家菜園と、その向こうには木造の古びた家屋。菜園にはとても背の高い木や珍しい花も植えられて

いる。

二人は菜園をまっすぐ突き進み、家のドアの手前で止まった。

「ユバ・ベルグの家つてこれ？」

「ええと……そうみたい。随分と古い家ね。」

キトがノアから貰った地図をみて答えた。ユリアがドアをノックするが、返事はない。

「突然失礼致します。ノアさんの紹介で来た者です。」

キトがノックをしても同じく物音ひとつしない。

「留守かしら。」

ドアノブをまわして押すと、鍵はかかっておらず簡単に開いた。しかしドアは半分ほど開いたところで中に積み上げられている本にぶつかり止まってしまう。本の山が崩れる音がした。

「これってサスペンスで定番の……何言ってるのユリア」

中へ入ると、外見とは裏腹に小奇麗で普通の民家と変わりない様子だった。玄関がいきなりリビングルームに繋がっているところやホルマリン漬けになっている見たことも無い草花の数々を除けば、揺り椅子の上には本日の朝刊、机の上には眼鏡ケースとペン立て。

生活観はあるのに人がいない。

「すみませーん！」

キトが大きな声を張り上げるが、やはり返事はなかった。

「……やっぱりいない。外で帰ってくるまで待っていてましょう。」

「ええ？聞こえてないだけだろ？鍵があいてたしな。奥も見てみようぜ。」

キトはユリアの手を引いて外へ出ようとしたが、反対に彼に手を引かれずると引つ張られる羽目となった。

「あのねユリア、他人の家なんだから勝手に奥ま

で入っちゃ……」

「あ、アレじゃないか？」

「え？」

キトはユリアが指差した先へ視線をうつす。そこには分厚い本を片手にぶつぶつと何かを呟いている細身の男性の姿。リビングもとい玄関の隣は、いきなり広い書斎になっているのだ。

「そうかもね……」

キトが答えると、ユリアはその男に近づき話しかけた。

「アンタがユバなのか？」

男は本に熱中していてこちらに気付かなかったの
で顔を覗き込んでもう一度。男は驚いて顔を上げ
ると、二人を見やった。

「ああ、ノアの客人か。話は聞いている。いかにも、私がユバだ。」

ユバは本に葉をはさむと、二人と握手をかわした。
ユバはまさに学者といった風貌で、ノア曰く薬草
学・回復術に長けているそうだ。翡翠の長い髪を
下方で軽くひとつに束ね、読書する際や研究の際
にのみ使用する眼鏡の奥には浅葱色の瞳。白い肌、
細いからだに威厳のある態度、声。

専攻は薬草学、回復術だが、この人なら何でも
知っていそうだと大した根拠もなしにそう思って
しまった。

「俺たち黄の……」

「聞いている。君たちの境遇、素性。まあリビン
グで話をしよう。」

さつそく話をきりだしたユリアをユバは手で制す
と二人を玄関兼リビングへ連れて行き、揺り椅子
に腰をおろした。座布団にされた朝刊がぐちゃり
と音を立てた。

「つまり君たちは、どのようにして黄の大陸から
最も遠い赤の大陸へ、しかもこんな短時間で移動
してしまったかを知りたいわけだ？」

ユバは眼鏡ケースに眼鏡をおさめながら言った。

「それと、できるだけ早く帰りたいからその方法
も。」

ユバは眼鏡をかけて赤くなった目頭をおさえなが
ら頷く。少し間をおいてから話し始めた。

「……大陸間の移動は船でしかできないこと
は知っているね。」

「ああ。」

ユリアはソファに深く腰かけて答えた。

「その船はすべて国が……大陸の王族が運営して
いる。大きくわけて貿易船と客船の二つだね。そ
して私たちのような民間人は客船にお金を払って
乗るわけだが……その客船はこの大陸で言う王

都イザーヤと、その遙か南にある港からしか出航していない。あまり港を増やしすぎると人は物のチェックがしにくいからね。」

ユバの話に二人は相槌をうつ。

「それと、客船は隣の大陸へしか移動できない決まりになっている事も知っているね？この赤の大陸から黄の大陸へ戻ろうとしても、その間に青・緑・白のその他すべての大陸をはさんで渡らなければならぬ。だから……数週間やそこらで帰るのは無理があるかな。」

「……………」

明らかに沈み込むユリアとは対照的に、キトは落ち着いて話に耳を傾けている。

「おいおい、どうする？絶対キャラバンの皆心配してるって……」

ユリアは顔を手で覆う。

「ユリア、まだ話の途中よ。」

キトはユリアの手首を掴んで元の位置へ戻した。

「今までの話は帰る方法。そして、何故二人がこんな辺境へ短時間で移動してしまったのかだ……君たちは、こんな術をご存知かな？」

ユバが何かを呟いて神に祈るように両手を重ねると、彼の目の前に小さな魔物が姿を現した。

丸いからだに小さな羽根、大きな目。

言っでは悪いが、とても弱そうな魔物だ。ついでに言うとも頭も良さそうではない。

「俺……この術、何度も見たことあるような気が……。」

ユリアは魔物をまじまじと見つめる。

「何度も？」

その言葉をきいて、ユバは首をかしげた。

魔物はそんなユバのまわりを嬉しそうに飛び回っている。

「……………何こいつ……………うざ……………」ちよつとユリア！」

「あはは、こら、テオ。こっちに來て静かにしておいてくれ。」

テオという名の魔物は大人しくユバの膝の上へおりてきて、ごろりと仰向けに寝転がった。

「……………召還術。」

ずっとテオを見ていたキトがそう呟く。

「自分の内なる力を使って特定のモノを呼び寄せる……召還術。」

キトがはつきりとそう言うと、ユバはテオを撫でながら笑顔をつくった。

「正解。この術は召還術といって、彼女の言うとおり何かを召還する技術。道具や、武器や、魔物などなど、その人によって様々だね。」

ユバが説明をすすめる度、キトの顔色が悪くなつていく。そんな彼女の異変に気付いたユリアは何もわからないまま、キトの手をぎゅつと握って小声で言った。

「大丈夫だよ、キト。」

「ユリア……」

「帰るときは、絶対二人一緒。今までもそうだっただろ？」

「……うん。うん、そうね……」

キトは軽く深呼吸をすると、口を開いた。

「つまり……」

「もしかして、だけど」

ユバの言葉にキトの言葉が重なる。ユバは笑顔でキトに先を促した。

「もしかして……私達が急にこんな所に来たのって……どちらか一方もしくは私達が誰かに“召還”されたから……?」

キトが出した答えにユバは顔色ひとつ変えない。

「召還……!? ヒトがヒトを召還なんて、そんな事出来るのかよ!?!」

ユリアは誰もが思うであろうそれを口にした。

召還といえば、魔物を呼び出して一緒に戦ったり、持ち歩くことのできない武器や防具を出現させたり、というイメージだ。ヒトがヒトを召還できるならこの世界はメチャクチャだ。

「素晴らしい。ご名答。それに、そう思うのもごもつともだね。ヒトがヒトを召還するということ。それは、正確に言えば不可能だが……可能だ。」

『？』

「そう試みることは出来るがしかし、成功はしないということ。ヒトがヒトを召還なんてことは、どれだけ魔力が高くて召還術の研究をしていたって、誰にも出来ない決まりになっているんだ。誰かが誰かを召還しようとしても周りの人を巻き込んだり自分のもとへ呼び出せず全く違う場所へ

対象が現れてしまったりする。そしてこのことは、危険性が高いことから全世界で禁止されている。

誰かを生き返らせたり、千年前にタイムスリップすることが不可能なのと同じだよ。」

ユバはそう言つて垂れてきた前髪をかきあげた。

「ちなみにテオは魔物だから召還は可能だ。」

テオが長い髪にぶら下がった状態のまま笑う。

「でも誰がなんのために俺らなんかを……」

「……さあねえ、それは本人に合ってみなければ。無責任なように申し訳ないが、私にもわからないね。」

ユバが指をパチンと鳴らすと、テオは煙につつまれて消えた。元いた場所へ送り還したのだ。

「……………そんな事を考えていてもキリがないわ……。まずはこれからのことよ。帰るためにすべの大陸の王都を通らないといけないんだもの。かなり骨が折れるわよ……。王都へ入るための通行証も必要だわ。」

「そっか……。黄の大陸でも王都へ入るのに必要だったもんな。」

「ああ、それなら、」

ユバの声に二人はゆっくりと顔をあげた。

「私が昔使っていたものがあるから、譲っても良い。相当黄ばんでぼろぼろだが。紙だからな。」

「やったー！」

「ありがとう！」

二人は沈んだ顔からうつてかわって明るいい笑顔になって喜び合っている。

「それと、他のもつと詳しいことをイザーヤ……王都の城で働いている占術師が教えてくれるかもしれない。彼女は私の知人だ。私の名前を出せば優遇してくれることだろう。」

そう言つてユバは二人に通行証を手渡した。透明の薄いケースに大切に保管されている。その後他愛ない世間話に花を咲かせ、夜になったので帰ることになった。

「今日は本当にありがとう。助かった。」

「いいえ、どういたしまして。ノルゼンからはマテイルという町をまず目指すと良い。その後、山をひとつこえて少し歩けばイザーヤへ向かう馬車がたくさん停まっている場所へ着く。そこからは馬車に乗っていればすぐに王都へ着くよ。遠くはないだろう。」

「わかった！ありがとう！」

二人はユバと握手を交わしてもと来た道に戻っていく。暗い夜道に明かりひとつ無いが、キトの魔法で二人の周りは明るく光っている。ユリアとキトが見えなくなるまで見送ってから、ユバは軽いため息をついた。

「あの女の子……“彼女”にそっくりだ……」

そんな子が彼と一緒に居るなんてなあ……。」

はじめの方は本人にしか聞き取れないような小さな声で呟いた。

「どうか、無事で。」

「……………」

ゆっくりと目を開ける。そこには昨日と変わらない、白い天井。

ユリアは毛布にくるまったまま横へと向きを変え、壁と向き合った状態で再び目を閉じた。

また、あの夢だった。何故かあの夢をみた後、いつも自分は泣いている。

—— なつかしいから？

いや、よく分からないけれど、それだけではない気がする。それほど幼すぎるわけでもなかったはずなのに、なくしてしまった遠い過去の記憶。目覚めると自分の手に握り締められた毛布についた皺が自らの眉間にもくつきりと残っている。流れた涙のあとと、目の腫れをなおすのがめんどろ……だ……。

明日は朝九時に出発、遅くても八時に起床！
昨日の自分はそう言った。今日、今の時間は朝の八時五分。まだ涙のあとと腫れがひいていない。このままじゃ、絶対キツにため息つかれるなあ。

—— どうしてだか とても ——

「痛いなあ、畜生……。」

「おはようユリア。あと三十分で出発よ。」
「はぁーい」

できるだけ明るく返事をしてノアのつくつくつてくれた朝食にありつく。キトの視線は痛いけれど、ため息をついて注意されることはなかった。

でも、もしかしてばれたかもしれない。

泣いていたこと。格好悪い。

ユリアは苦笑してスープをかき混ぜた。向こうではとくに用意の済んだキトとノアが話をしていく。最後のサラダをかきこんでチーズを口へ放り込むと、ユリアは自分の頬を軽く両手で叩いた。

「よし、もう大丈夫。」

二人のところへ歩いていくと、キトの足元にある小さな荷物に気付く。ユリアがそれを見ていると、キトが口を開いた。

「今日出発するために用意しておいたの。はい、これはユリアの分。」

キトは微笑みながらユリアに荷物をひとつ手渡した。ちなみに、大きい方。

「通行証は私の荷物の中に入ってるから安心して……ユリア？」

キトは黙り込むユリアの顔を覗き込んだ。

「あはは、なんか今日のキトは優しいな。」

「……失礼にも程があるわよ……。」

キトは軽くユリアを睨むと自分の荷物を持ち上げた。

「わかってますよ。キトはきつく見えるんだけど、
本当は優しいんだよな。」

「！」

「……キト？」

真っ赤になった顔を隠すためにキトはユリアに背
を向ける。

「キトってば。なに急に後ろ向いたりして……。」

「う、う、うるさいっ！しつこいッ！」

「はうあああ!？」

キトの鉄拳がユリアの顎にめり込む。

「うわぁ……ぼくって立場ないね……。」

そんな二人のやり取りを見てノアはそう小さくも
らしたのだった。

